

モーツァルト巡礼ーその19

K.518 水谷康男

K549 は、イタリア語原題のカンツォネッタ「今や見当たらず」1788年7月16日ウィーンにて作曲された、ソプラノ2人とバスにバセットホルン3本の2分余りの小さな三重唱です。

K550 は、交響曲第40番短調、K551 は、交響曲第41番ハ長調「ジュピター」で、すでに交響曲をまとめて記述しているので、ここでは省略いたします。興味のある方は、モーツァルト巡礼ーその5をご覧ください。

K552 は、リート「出征の歌」で、1788年8月11日ウィーンで作曲されました。当時始まったトルコ戦争の出陣のために作曲されたもので、3分足らずの軽い作品です。

K553～K562の10曲は、1788年9月に作曲されたカノンがまとめられています。

K553:4 声のカノン「アレルヤ」

K554:4 声のカノン「アヴェ・マリア」

K555:4 声のカノン「私は悲しい」

K556:4 声のカノン「用意をしろ」

K557:4 声のカノン「わが太陽はかくれ」

K558:4 声のカノン「プラーターに行こう」

K559:3 声のカノン「読むの(なめろ)がむずかしい」

K559a:4 声のカノン「お馬鹿さんのバイエル」

K560:4 声のカノン「お馬鹿さんのマルティン」

K561:4 声のカノン「おやすみ、おばかさん」

K562:3 声のカノン「いとしの愛人よ」

K563 は、モーツァルトの晩年(1788年)に書かれた弦楽三重奏(ディヴェルティメント)変ホ長調で、弦楽三重奏という編成で到達しうる最高峰の一つと評される傑作です。

全6楽章の大作(通常のディヴェルティメントよりはるかに規模が大きく演奏時間45分程もあります)で、ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロが完全に対等→ どれかが伴奏に回ることがほぼなく、常に三声の対話が続きます。ディヴェルティメントという娯楽音楽の名を借りつつ、内容は極めて深く室内乐的完成度が高いです。この作品ではヴァイオリン:旋律だけでなく内声・対旋律も担当 ヴィオラ:和声の要でありながら主役級の活躍 チェロ:低音支え+旋律参加(ここが革命的) という、まさに三人の名手による知的会話のような音楽です。

楽章構成は、I:Allegro - 交響曲のような堂々たる開始 II:Adagio - 深い歌心と静かな緊張感

III:Menuetto I - 優雅だが内声が非常に凝っている IV:Andante(変奏曲) - モーツァルトの変奏技法の極致 V:Menuetto II - 民俗舞曲風のリズム感 VI:Allegro - 一度聴いたら忘れられないメロディーで室内楽とは思えないスケール感で締めくくります。

1788年9月27日にウィーンで作曲されました。モーツァルトの友人でかつフリーメーソンの兄弟でもあり、モーツァルトの晩年の窮状を助けてくれたブッフバルクのために作曲されました。

ペラント・デュオ コンサート



小出信也 友情共演

ペラント・デュオ

ブラハムから来たヴァイオリンとヴィオラのデュオ
ヴァイオリニストの レンカ・ペラント と
ヴィオリストの ヤン・ペラント により

2014年アメリカのケンタッキーで行われた
セントラルケンタッキー音楽祭に参加したとき結成
され、そのデビューは大成功をおさめた。

それ以来、二人の演奏会は既に定期的にチェコ、ポ
ーランド、ドイツ、フランス、ルーマニア、タイ、
中国、アメリカ合衆国等で行われている。

又ペラント・デュオはチェコ共和国に於ける「ボヘミ
アの森 夏の夜の国際音楽祭」の結成者になった。

今回は、モーツァルトの隠れた傑作「ヴァイオリン
・ヴィオラの二重奏曲」2曲を演奏するのに加えて、
ヴィオラのヤン・ペラントとは昔からの友人である
フルーティスト 小出信也 の特別友情出演による
フルート・ヴァイオリン・ヴィオラのトリオにより
後期の傑作「ディヴィルティメント」変ホ長調 K.563 を
共演します。名古屋モーツァルト協会ならではの、
モーツァルトの作品ばかりでお送りいたします。
皆様のご来場をお待ちしております。



特別友情共演 フルーティスト 小出信也

Ⅱ.A.モーツァルト:ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲 ト長調 K.423

Ⅱ.A.モーツァルト:ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲 変ロ長調 K.424

Ⅱ.A.モーツァルト:ディヴィルティメント 変ホ長調 K.563(フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ版)

日時:平成28年6月13日(月) 開場 18:15 開演 19:00

会場:電気文化会館地下2階 ザ・コンサートホール

名古屋市中区栄2-2-5 Tel. 052-204-1133 (地下鉄伏見駅4番出口 東へ徒歩2分)

会費: 一般: 3000円 (学生: 無料 (要申込み))

チケットのお求めは 宝文プレイガイド 052-972-0430 電気文化会館チケットセンター 052-204-1133

又は 名古屋モーツァルト協会 水谷康男 Tel. 090-3304-6412 メール: fmg14837@nb.infoweb.ne.jp

2016年6月13日開催の当名古屋モーツァルト協会主
催 第103回コンサートで、この曲が、変わった編成で演奏
されました。ヴァイオリンとヴィオラのペラントデュオとフルート
の故:小出信也さんによる、変則的な

本来 ヴァイオリン → 今回 フルード

ヴィオラ → ヴァイオリン

チェロ → ヴィオラ

という編成のトリオでした。

演奏前に、小出さんが、今回の演奏に際しての準備(練習)
の大変さをさりげなく語られていましたが、演奏後の達成感
はさぞやと思われるほどの心が洗われる名演でした。一番
有名な最終楽章をアンコールでもう一度聴くことができた
のも、忘れられない思い出となりました。

K564 は、ピアノ三重奏曲 ト長調 で、1788年10月30日にウィーンで作曲されました。モーツァルト最後の
ピアノ三重奏曲で、あくまでもピアノ中心の作品となっています。Ⅰ:アレグロ、Ⅱ:アンダンテ、Ⅲ:アレグレット
も全3楽章演奏時間17分程の作品です。

K565 は、2つの田園舞曲(コントルダンス)Ⅰ. 変ロ長調 Ⅱ. ニ長調 1788年10月30日 ウィーン
で作曲されたと、自作目録に載っていますが、楽譜は発見されていません。そのためか、このCD全集にも記録
されておらず、ネットで探しても、演奏に接することはできませんでした。

K566 は、ヘンデルのオラトリオ「アクスとガラティア」の編曲です。ジョージ・フレデリック・ヘンデル のオラトリ
オ「アクスとガラティア(Acis and Galatea)」を素材にして編曲した作品です。原曲は牧歌的で親しみやすい旋律
が特徴のバロック期オラトリオですが、モーツァルトはそれを室内乐的・古典派様式に整え、和声やテクスチャー
を洗練させています。いわば「ヘンデルをモーツァルトの言語で読み替えた」好例です。

楽章	原曲での位置・内容	種類	音楽的特徴
第1楽章	序曲(Overture)冒頭部分	器楽	牧歌的で明るい開始。ヘンデルの劇的 導入を室内楽向けに凝縮
第2楽章	アクスのアリア (愛の喜びを歌う場面)	アリア	流れるような旋律美。モーツァルト的な 歌心が強調される
第3楽章	合唱「Happy we!」系素材	合唱	原曲の祝祭的性格を軽快な アンサンブルに変換
第4楽章	ガラティアの抒情的アリア	アリア	優雅で透明感ある旋律線に再構成
第5楽章	ポリュフェーモの場面由来の 力強い部分	アリア (低声)	重厚さを残しつつ古典派的均整に整理
第6楽章	終結合唱素材	合唱	明るく締めくくる祝典的フィナーレ

残念ながら、この曲もこのCD全集には入っておらず、今のところ演奏に接することができておりません。

K567 は、6つのドイツ舞曲 です。モーツァルト晩年の 1788 年 12 月 6 日に作曲された舞曲集で、当時ウィーンで流行していた社交ダンス音楽のエッセンスが凝縮された作品です。明快で親しみやすい旋律、シンプルながらも和声の色彩感ほまさに晩年モーツァルト魅力にあふれ、宮廷の舞踏会や社交の場で実際に踊られることを想定した音楽でありながら、今日ではコンサートでも十分楽しめる芸術性を持っています。

Fl:2、P:1、Ob(曲によっては Cl):2、Fg:2、Tp:2 本に、ティンパニ(小太鼓)、Vn.二部、Vc. Cb.の編成で演奏される全 6 曲演奏時間 10 分足らずの作品です。

K568 は、12 のメヌエットで、1788 年 12 月 20 日に書かれたとされる、軽やかで洗練された舞曲集です。宮廷舞踏に由来するメヌエットの形式を保ちつつ、モーツァルトらしい優雅さと機知が随所に感じられます。管弦楽編成から、ピアノ独奏編曲が現在では普及しています。

調性と性格の多様性:明るく社交的なものから、少し陰影を帯びたものまで、短い中に豊かな表情があります。

演奏しやすく、聴き映えもする:技術的には比較的平易で、ピアノ学習者のレパートリーとしても人気。一方で音楽的完成度は非常に高いです。

サロン文化を感じさせる音楽:大規模作品とは異なり、親密な空間で楽しめる性格が強く、18 世紀ウィーンの雰囲気伝わってきます。

音楽的な魅力を一言でいうと「簡潔なのに、モーツァルトの美意識が凝縮された小宇宙」それぞれが 1~2 分ほどの小品ながら、旋律の自然さと和声の美しさはさすがです。

第 1 曲:明るく端正な開始曲 → 儀礼的で気品ある「正統派メヌエット」

第 2 曲:軽快で会話的 → 左右の掛け合いが楽しい社交的性格

第 3 曲:やや内省的 → 短調風の陰影を感じさせる落ち着き

第 4 曲:跳ねるようなリズム → 子どものような無邪気さ

第 5 曲:歌う旋律美 → オペラ・アリアのように流麗

第 6 曲:優雅で貴族的 → 宮廷舞踏を思わせる典雅さ

第 7 曲:軽妙洒脱 → ユーモアを含んだウィーン風

第 8 曲:しっとりした抒情 → 夕暮れのサロンの雰囲気

第 9 曲:活発で躍動的 → ステップが目につかぶ舞曲性

第 10 曲:柔らかく親密 → 家庭音楽的な温もり

第 11 曲:少し翳りのある気品 → モーツァルト特有の“微笑みの悲しみ”

第 12 曲:晴れやかな締めくくり → 明朗で祝祭的な終曲 合計演奏時間 30 分程度

K569 は、アリア「強いられることなく自らの心より」といわれますが、楽譜も紛失して子細不明で、この全集でも収録されていません。

K570 は、ピアノソナタ 第 16 番 変ロ長調で、1789 年 2 月の作品です。モーツァルト晩年に書かれた最も洗練されたピアノソナタのひとつで、派手さよりも内面的な美しさ、構造の完成度、歌心が際立つ作品です。当時のウィーン滞在期、経済的には苦しい中でも、作曲技法は極限まで磨かれていました。

第 1 楽章:Allegro 明るく穏やかな主題で始まりますが、内声の動きや転調が非常に精巧。表面は優雅、中身は高度な対位法と和声感覚の宝庫。歌うような旋律、左手の伴奏が単なる和音でなく、流れるように意味を持つ静かな知性を感じる構築美、室内楽的な上品さと舞踏音楽の軽やかさの絶妙なバランス。第 2 楽章:Adagio このソナタの精神的核心とも言える楽章。深い孤独感と祈りのような静けさなかで装飾音が感情の吐息のように使われる時間が止まったような透明感、晩年モーツァルト特有の「明るさの中の哀しみ」が凝縮されています。第 3 楽章:Allegretto 軽やかで舞曲風ですが、決して単純ではありません。

優美で自然な流れ、細かなリズムの工夫、微笑の奥に知性 人生を達観したような穏やかな喜びに満ち溢れています。このソナタは、技巧誇示がない、完璧な形式美、感情が内側から滲み出る という点で、ベートーヴェンのドラマ以前の「古典派の到達点」とも言われます。演奏時間 20 分弱の傑作です。

K571 6つのドイツ舞曲 は、1789年2月21日に完成されたとされる舞踏用の小品集で、宮廷や市民の社交の場で実際に踊られていた音楽です。メヌエットよりも素朴で親しみやすく、しかし旋律や和声の洗練度はまさにモーツァルトらしい魅力に満ちています。ウィーン王宮のレドッテンザールで催される舞踏会のために作曲されました。舞曲でありながら旋律がとても美しく、シンプルな構成の中に転調や表情の変化が巧みに織り込まれている「生活の音楽」としてのモーツァルトの才能がよくわかる作品です。

第1曲 ニ長調 明るく開放的で、堂々とした始まり。まるで舞踏会の幕開けを告げるような晴れやかさがあります。

第2曲 イ長調 軽やかで少しおどけた雰囲気。ステップが自然に弾むような、親しみやすい舞曲。

第3曲 ハ長調 やや叙情的で歌心のある旋律。踊りながらもどこか“聴かせる音楽”になっています。

第4曲 ト長調 リズムがはっきりしていて躍動感溢れ、活発な社交の場の空気が伝わってくるようです。

第5曲 変ロ長調 柔らかく優雅で、少し内省的。穏やかな微笑みを感じるような中間的性格。

第6曲 ニ長調 快活で締めくくりにあふさわしい明朗さの、楽しい余韻を残して終わります。

各1分半ほど計約9分強の作品です。

K572 「メサイア」ヘンデルの原曲のオラトリオ「メサイア」による編曲作品です。1789年3月6日にエステルハーギー家で初演された、2時間半に及ぶ大作ですが、あくまでも編曲作品であるためか、このCD全集には収録されていません。

K573 は、デュポールの主題による9つの変奏曲で、1789年ポツダムで初演されました。フランスの名チェリスト:ジャン=ピエール・デュポール(Jean-Pierre Duport)のメヌエット主題をもとに書かれたピアノ曲です。モーツァルトがベルリン宮廷を訪れた際、チェロ王と呼ばれたデュポール兄弟と交流したことがきっかけとされています。フランス風の洗練、モーツァルトらしい透明なピアノリズム、技巧的だが決して重くならない 特に短調変奏(第6変奏)の一瞬の陰りが、全体をぐっと引き締めます。

K574 は、ジーク ト長調 で、1789年5月16日に書かれたとされる鍵盤小品で、ベルリン旅行の途中ライブチビで作曲されました。バロック由来の舞曲形式「ジーク(Gigue)」を、モーツァルトらしい古典派の洗練で再解釈した一曲です。

K575 は、弦楽四重奏曲 ニ長調 K.575(1789年)は、いわゆる「プロイセン四重奏曲」第1番。チェロを愛奏したプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世のために書かれ、チェロが旋律的に大活躍するのが最大の特徴です。この曲は、モーツァルト晩年の室内楽らしく、明晰で明るいニ長調の輝き、各声部の完全な対等性、とくにチェロが“伴奏役”から“歌う主役”へ昇格 が見事に融合しています。「優雅なディヴェルティメント風」から一歩進んだ、成熟した古典様式の到達点とも言える作品です。この曲の本当の凄さは、それまでの四重奏では第1ヴァイオリンが主役、他は支え役だった従来の構図を、4人全員が対等に歌う室内楽へ完成させたという点にあります。特にK.575は、チェロの地位革命記念作品と言ってもいいほどです。

以降、次号に続きます。